

摘録 大阪大谷大学蔵『岩渕夜話』

高橋圭一

『岩渕夜話』は、甲州流兵学者大道寺友山（寛永十六年一六三九から享保十五年一七三〇）の編著である。執筆の目的は徳川家康顕彰にあったと思しい。現存作は極めて多く、近世期には広範に流布していた。家康像の形成に幾分か寄与したであろうが、手近な叢書類には翻刻されておらず、従来余り重視されてこなかったと言つてよい。

筆者は『京都大蔵 頼原文庫選集』第六卷（臨川書店 二〇一八年）に京都大学大学院文学研究科図書館蔵頼原文庫本『岩渕夜話』の翻刻と解題を載せ、『國語國文』（京都大学文学部国語学国文学研究室編）第八十九卷第一号（二〇二〇年一月刊）に拙稿「大道寺友山『岩渕夜話』について」を寄稿した。解題と拙稿で大阪大谷大学蔵『岩渕夜話』に言及している。（拙稿の注（2）に、本稿を紹介した。）ここでは、大阪大谷大学蔵『岩渕夜話』を諸本の一としてで

はなく、『岩渕夜話』の特徴を知る手がかりが得られる資料として用いている。大阪大谷本冒頭第一条を引く。「一、東照宮御降誕より尾州へ御越の段、別事無之略之。『武徳大成記』にあり。」

ここで略された『岩渕夜話』の本文と、『武徳大成記』の一節を比較することが、『岩渕夜話』の作品論の端緒となる。他の例は『國語國文』所掲の拙稿につかれない。

本稿は「摘録」である。何を摘まんだかと言うと、主に右に書いたような、同内容の記事を含む他書に関する注記である。『岩渕夜話』本文をそのまま書き留めた条は、（全文有り）として省略した。加えて行間・上欄等の朱書き等も翻刻した。書写者が、『岩渕夜話』から史実を抽出しようとし、一方史実を補ったことが、判明する。漢字のルビを朱で施した箇所が十例弱あるが、これらは省略した。

大阪大谷大学蔵本（請求番号 914.5 D 写本一冊）の書誌を記しておく。

○表紙 水浅葱色。二三・五×一六・六糶。

○題簽 近代の補。左、無辺、「岩淵夜話 全（活字）」。

二一・三×四・六糶。

○丁数 五八丁。

○扉題 「岩淵夜話 全」。

○巻頭書名 「岩淵夜話」。

○尾題 「岩淵夜話 大尾」。

○行数 半丁一一行。毎行二七字前後。

○見返し 文政第五年／（行替え）壬午 三月吉日／秋本

姓／浅海姓。

○奥書 文政^{壬午} 年季春写之 秋本朝晨。下に秋本蔵書の

朱印。

○蔵書印 第一丁表に白金屋の墨印、最終丁裏に○（カス

レ。読めず。）店／柳井／久保町／登茂助の墨

印、防州／柳井／境与の墨印、等。判読できな

いものもある。

摘録箇所の翻刻に際しては、句読点・濁点・中黒を補い、書名には二重鍵括弧を施した。朱書き等を引用する際は鍵括弧で括り、引用中の発語は二重鍵括弧を施した。

各条一、の上に通し番号をアラビア数字で打った。本文が無い条もあるが、頼原文庫本の翻刻の通し番号（同位置。ただし、漢数字）と一致させるためである。

岩淵夜話

1一、東照宮御降誕より尾州へ御越の段、別事無之略之。

『武徳大成記』にあり。

此時尾州に人質と成て御座ける時、川野藤蔵と申者小鳥杯進上仕、常に御伽に参り慰奉りしを御幼少の御心に御満足に思し召れ、御忘れなされずして後に召出され、御懇に遊ばされけると也。「略之」、としながら、末尾のくだりは書き留めている。）

2一、天文十八^{乙酉} 三月 神君御歳八才御父広忠卿に送れさせ玉ひ、夫より安祥の城、今川・織田の懸合略之。

『武徳大成記』にあり。「『武徳大成記』にあり。」はやや細字であるが、同じ大ききで翻刻した。以下、このような注記を二行割にしている箇所もあるが、同

じ大ききとした。すべて同筆である。）

3一、神君御具足初より岡崎御帰参の事略之。 右同断。

4一、永禄三年今川尾州攻、義元討死、神君大高より御帰
城略之。 右同断。

5 (全文あり) 元康の右に朱書き「神君の前の名。」(朱
書きは本文よりかなり細字であるが、同筆と思われる
る。翻刻は同じ大ききとした。以下の朱書きについて
も同様。)

6 (全文あり)
7一、水野下野守信元扱を以、織田家と御和睦の段略之。
『武徳大成記』に有。

8一、永禄六年牛窪城攻。御馬印御仕替の段略之。 『武
者物語』に有。

9 (全文あり)

10 (全文あり)

11 (全文あり) 上欄に朱書き。「『武家高名記』に曰、浅
井は藤原氏三条大納言公綱卿勅勤を蒙り玉ひ、嘉吉年
中に江州に流刑せられ、京極侍従に預け玉ふ。此所に
て、最愛の妾男子を生り。三才の時京極侍従是をあわ
れみ、丁野村をあたへて家人とす。浅井新左衛門重政

と号す。備前守長政は重政より五代の孫なり。浅井郡

丁野村を領せし故浅井と名のる。去る永正年中、佐々
木六角義実・京極高清、江南・江北を領し龍虎の如く
威をふるふ。勝負決せざりしに、京極入道環山病氣に
て死せられければ、家臣上坂治部太輔泰貞、其遺跡を
立り。于時浅井亮政これを憤り、永正四年謀反を企て
上坂を亡し江北を治め、長政に至て四代にして、久政
・長政父子信長に滅せらる。」(『武家高名記』は樋口
好運著、元禄九年(一六九六)自序、『本朝武家高名
記』。同書(国立公文書館蔵内閣文庫本 請求番号169
302に拠る。国立公文書館のホームページより全文閲覧
可能。)第二武将伝卷之四「浅井備前守素姓之事」の
要約である。)

12 (全文あり)

13 (全文あり)

14 (全文あり)

15一、神君岡崎御坐遊はされ候時、活置せられ候鯉を鈴木
久三郎取上て料理致したる一件略之。 行間及び欄外
に朱書き。「御用意に活置せられ候鯉を取上たる事聞
し召れ、以の外御立腹にて御成敗も可被成と久三郎を

- 呼出し、長刀鞘をはづし待居給ふを、久三郎見るより
 大小を五六間程後へ投捨、眼を屹と見開き、『愚成大
 将かな、魚鳥に人をかへる作法何れの国に候哉。夫に
 ては中々天下の望はなる間敷』と申上ける。実もと思
 しけるにや、長刀を投捨奥に入せ玉いける。是は此頃
 ハシリの者止場にて鳥をとり、一人は堀にあみを打け
 る。此兩人追込ありしをいわん為に、態と鯉を料理し
 て諷諫申上しなり。感じ思し召てハシリの者を御免被
 仰付、鈴木にも満足思し召さる、由御意有し。久三郎
 も涙を流して有難がりしと也。』
- 16 (全文あり)
- 17 (全文あり) 上欄に朱書き。『大成記』には本多百介
 ・名倉喜八兩人遣はされ候処へ疑心を抱き、宴を設け
 本多を刺とあり。本多百介、後に庄左衛門といふて
 『甲陽軍鑑』にあり。』
- 18 (全文あり)
- 19 (全文あり)
- 20 一、天正十二年織田信雄と秀吉公小牧陣の段略之。
 『老人雑話』にあり。
- 21 (全文あり)
- 22 (全文あり)
- 22 後半(大阪大谷本では二三条を二条に分ける。本文末
 尾の本多作左衛門の書状が「一筆啓上火の用心、おせ
 んなかな、屋きたなとも馬こやせ、かしく。」「屋き
 たなとも」の右、行間に「本ノマ、不分」と墨書。異
 文であるう。)
- 23 一、織田信雄の御取持にて、越前黄門秀康君秀吉公の御
 養子に成らせられ、且御和睦秀吉公の妹御浜松へ入
 興、大政所岡崎へ御下りの段略之。『武野俗談』に
 あり。
- 24 (全文あり)
- 25 (全文あり)
- 26 (全文あり)
- (信康切腹の条。穎原本になし。諸本には載せるもの
 が多い。『穎原文庫選集』解題中に翻刻した。)
- 27 (全文あり)
- 28 (全文あり)
- 29 (全文あり)
- 30 (全文あり)
- 31 (全文あり)

32 一、太閤秀吉公朝鮮征伐の刻、肥前名護屋にて自身御渡海なさるべきとの趣、浅野弾正、秀吉公に狐が付候との答略之。書名なし。

33 (全文あり)

34 (全文あり) 上欄及び行間に朱書き。「『甲陽軍鑑』に

曰、曲測は板垣信形草履取鳥若と云、後曲測庄左衛門といふと也。年四十歳に余るまで公事数四十五度、其内一ツ勝一ツは扱ひ、残りは皆負け候と也。初は板垣被官に被成、板垣同心に仰付られけると也。板垣弥次郎は本郷八郎左衛門と云もの、小身とて侮り、慮外を致し伐殺さる。本郷道理成る故、命を助け座敷籠へ入置る、所に、『本郷成敗なきは信玄公の仰にて殺され候』と、信玄公をねらいける由聞し召れ、義理を存じやさしき覚悟を感じ玉ひ、御主殿の白洲へ召寄せ、『板垣は当座の事、誠の主は我也』と、さまざま申宥め玉いければ、誓紙を任り隨身仕りけると也。」

35 一、太閤秀吉公御病氣に付て五老三老五奉行御定、後事御遺言の段略之。尤右の内、大坂御城内奥向において尼香藏主『松井』にあり。

(香藏主は) 神君に御氣を付大切に存じけるとなり。

是に依て 秀忠公別して御不便を加へられ、後は江戸へ召下され、道三河岸において居屋敷まで下され、其上香藏主子に川副六兵衛と申者、織田信長公に奉公せし川副式部が惣領なるを大御番に召出され、香藏主宿下りの為と仰付られ不浅御念頃なり。(神君に：からここ迄、頼原本に有り。) 此段『難波全記』『松井』等にも見へず。依て是をしるす也。

36 一、慶長四年の春、池田輝政・福島正則・細川忠興・浅

野幸長・黒田長政・加藤清正・加藤嘉明等の面々石田を討べしとの企。『松井物語』にあり。

神君の御嘆之段略之。尤此時石田を誅罰の義、右の面々より 神君へ伺ひ奉る処に、夜中に本多佐渡守登城す。「御夜詰引け候哉」と尋ければ、御兒小性土井甚三郎大炊頭居けるが「今少先程御寝処へ入らせ玉ふ」と云。佐渡守聞て、「申上度義候間登城仕候」と申上られよ」と云。甚三郎参て其段申上の所に、未御目覚させられ御座候て「是へ参るべく」の由上意有り。佐渡守御側へ参り、神君「夜中の出仕何事ぞ」と仰有ければ、佐渡守いわく「いや別の義にても御座なく候。石田治部事は如何思召候哉」と申上れば、神君

曰「去れば其義を今も兎や角と思案してみるぞ」との上意也。佐渡守承り「もはや安堵仕候。御思案遊ばさるとの仰の上は申上べく様御座なく」とて御前を退出すと云也。(全体としては、穎原本よりかなり短い。ただし「神君の御變之段略之。」以下、及び引用は略したが、条末の二字下げのくだりは穎原本と同じ。)

37 一、慶長四年九月八日 神君大坂城へ御入、西の丸に御座なされ本丸へ御越秀頼公へ御対面の時、神君を殺害し奉らんと相謀段、大同小異なれ共格別是なく略之。

『松井物語』にあり。

38 一、慶長五年上杉景勝御退治御下向、六月十八日石部御宿、翌日は水口にて長東大藏太輔御膳を献まずべき候所、直様夜中御立の段略之。 右に同じ。

39 一、同小山御陣所へ上方蜂起の注進の段略之。 右に同じ。

40 一、遠州池鯉鮒の駅において加賀の井弥八郎、水野和泉守を討ける一件略之。 右に同じ。

41 一、八月廿三日、濃州岐阜の城を攻取るの注進、九月朔日江府を御立、岐阜近所八丈村瑞雲寺柿献上の一件略之。 右に同じ。

42 一、九月十五日関ヶ原合戦御勝利、山岡道阿弥勝鬨御執行の段申上る一件略之。 右に同じ。

43 一、日の岡峠 関処にて福島が使者口論、伊奈図書切腹の段略之。 右に同じ。『武野燭談』にもあり。

44 一、九月廿三日三成生捕、御陣所へ差出す段略之。

『松井』にあり。

45 (全文あり)

46 (全文あり)

47 (全文あり)

48 一、土方勘兵衛・大野修理兩人、関ヶ原已後本領安堵略之。『松井』にあり。

49 (全文あり)

50 (全文あり)

51 (全文あり)

52 (全文あり)

53 (全文あり)

54 無し

55 無し

56 無し

57 (全文あり)

- 58 (全文あり)
- 59 (全文あり)
- 60 (全文あり)
- 61 (全文あり)
- 62 一、神君役義仰付られ度人柄是有り、土井大炊頭へ人柄御尋、大炊頭答の段略之。『武野燭談』にあり。
- 63 (全文あり)
- 64 (全文あり) 松平武藏守初出の箇所の右に朱書き。
 「此時播州侍従——備前新太郎少将光政の父」、武藏守の左下に同じく「利隆。」上欄から欄外にかけて朱書き。『碎玉話』に曰、大坂冬陣武藏守は神崎に軍立し、弟左衛門督尼ヶ崎に軍立し、忠継は蜷江に向ひ敵を追払はる。利隆是を見て勇み進むといへ共、御目付城和泉守強て是を制す。利隆憤りを抑へて思惟ムツしする所へ、安部四郎五郎来る。利隆此由を告るに、安部の曰、『兄弟と云、眼前の敵と云、忠継克ずんば兄弟を棄る也。忠継勝ば自ら怯の毀りを受ん。』此一言に依りて利隆力を得、城が留るを聞ずして中津川を渡り、横筋違にかける。大坂落城の後、『此事の讒に逢て譴責せらるべし』との沙汰ある時、伴大膳を以て陳謝せらる」とあり。」伴大膳の言中「内府様への不忠」の右に朱書き。「此時大御所様。(頼原本では「上様への不忠。」)
- 65 (全文あり) 小出大隅守の右下に朱書き「三尹タケ。」
- 66 (全文あり)
- 67 (全文あり)
- 68 (全文あり)
- 69 無し

(本学日本語日本文学教授)